

埋文

とやま

Toyama Prefectural Center for Archaeological Operations

2020.9.30

VOL.

152



小竹貝塚出土品（富山市呉羽）
《歯牙製垂飾品》

小竹貝塚から出土した縄文時代の歯牙製垂飾品です。「歯牙製垂飾品」とは、ニホンジカやオオカミ、ツキノワグマ等の歯や牙に穴を開け、吊り下げることができるようにしたものです。首飾りや腰飾りに使われていました。

オオカミ、ツキノワグマといった獰猛な動物を捕獲するのは命がけであり、捕獲した者は英雄のように讃えられたはずで、実際、男性の埋葬人骨に添えられて出土していることから、狩りに成功した勲章だったと考えられています。

とっておき埋文講座 ● わくわく古代チャレンジ 2020

蜷川氏関連の館跡か？ — 富山市黒崎種田遺跡 —

埋文あらかると ● 古代農場「まいぶんファーム」登場!!

— ササゲ、エゴマ、綿花の栽培に挑戦 —

Center Flash ● 特別展「BONE <骨> — 貝塚で知る生命の証 —」

古写真発掘! ● 石垣遺跡 魚津市石垣

富山県埋蔵文化財センター

わくわく古代チャレンジ2020

とっておき埋文講座①



はじめに

わくわく古代チャレンジ事業では、毎年夏休みに県内の小学生とその保護者を対象として「ふるさと考古学教室」「まいぶん研究室」「こども考古学クラブ」を実施しています。



本事業では、埋蔵文化財に関する体験活動を通して、古代に生きた先人のくらしや知恵にふれ、考古学や文化財への関心を高めることを目的としています。また、子供たちが夏休みに取り組む自由研究への一助ともなっています。

ふるさと考古学教室

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大による状況を踏まえ、開催を土日祝日とし、1回の組数を少なくして実施しました。また、日程の事情で昨年度よりも体験メニューも少なくなりました。様々な制限がある中でしたが、昨年度の応募数を大きく上回る応募があり、嬉しい気持ちになったと同時に当センターの存在意義を強く感じました。

各教室の活動内容を紹介します。

○刀鍛冶を体験しよう (ペーパーナイフ)



800℃近くまで熱した五寸釘を叩いてペーパーナイフをつくります。「鉄は熱いうちに打て」の言葉どおり、熱しては叩き、熱しては叩きと繰り返して、釘を伸ばして刃を作ります。形づくられた熱い釘は、水に入れて冷やす「焼き入れ」を行うことで強度を高めます。最後に砥石で刃を研ぎ、柄を作って仕上げます。

作ったペーパーナイフの試し切りをすると、あまりの切れ味の良さにたくさん参加者から驚きの声が上がりました。

○古代の鏡の鑄造を体験しよう (錫鏡)



溶かした錫を鑄物砂で作った型に流し込み、冷やして固めて作ります。今回つくる鏡の原型は、射水市の上野遺跡から出土した弥生時代の鏡です。この鏡の中心には、花のような内側に向けた6つの扇が連なった文様(内向花文鏡)があります。冷やして固まった鏡の表面を砥石や耐水ペーパーで磨き、仕上げます。

作品は顔を映すためだけでなく、飾りや身を守るためのお守りとしても使えるので、参加者にとっても好評です。

○藍染を体験しよう (藍染エコバッグ)



エコバッグにビー玉や洗濯ばさみ、

輪ゴムなどを使って模様付けをします。それを藍液に漬け込み、染色すると、鮮やかな色の中に白めきの模様が表れます。模様付けの仕方や藍液の濃度、藍液の揉み込み具合によって作品の風合いが変わるので、手作り感が楽しめる活動になります。

藍の色は「ジャパン・ブルー」と呼ばれ、日本人に親しまれている色であるとともに、日本を代表する色として世界中に知られています。また、エコバッグは今まさにトレンドです。作られたマイ・エコバッグをぜひ活用していただけたらと思います。

○ガラスの装飾品を作ろう (ガラス玉)



ガスバーナーで溶かしたガラスを鉄芯に巻き付ける技法で小玉やまが玉を作ります。ガラスは単色だけでなく混色したり、別の溶かしたガラスで玉に模様付けしたりすることで、様々なガラス玉を作ることができます。

ガラス棒を持つ人と溶かしたガラスを鉄芯に巻き付ける人と、親子で息をぴったり合わせて丁寧に作品を作る姿が見られました。様々な形や模様の美しいガラス玉が作られ、素敵な装飾品に仕上がりました。

○大型まが玉づくりを体験しよう (滑石大型まが玉)

まが玉づくりは当センターの看板体験メニューの一つとして行っていますが、この教室では通常体験で使う石の2倍サイズのものを使います。まが玉づくりの醍醐味である穴あけの作業をし、デザインに合わせて荒削りをして形を作っていきます。最後は耐水ペーパーで磨くことで、表面がツルツルになり、石の素材模様も浮かび上がって



美しいが玉になります。

使用する石のサイズが大きい分、時間も労力も倍かかりますが、できたときの喜びもひとしおです。首飾りとしてだけでなく、カバンにぶらさげるアクセサリにされる方もいました。また作りたくなりましたら、ぜひ通常体験でのご参加もお待ちしています。

まいぶん研究室

当センターでは、毎年夏休みに来館する小学生やその親子を対象にまいぶん研究室を開設しています。今年度も考古学や文化財について関心を高めたり調べたりできるコーナーを設置しました。各コーナーの内容を紹介します。

○「タッチ・ザ・DOKI」と遺跡地図閲覧コーナー



市町村・校区別の遺跡地図とふれる標本箱「タッチ・ザ・DOKI」を置いて自由に調べられるコーナーです。自分が暮らしている近くに遺跡があり、土器が出土していることを知ること、考古学への親近感がわくようにしました。

○「記念物100年」展

文化庁事業「記念物100年」展に参加し、パネル展示をしました。記念物

の定義や代表的な「史跡」「名勝」「天然記念物」を紹介しました。



○記念物で遊ぼう！ —ペーパークラフトにチャレンジ！—



竪穴式住居や高床式建物、柳田布尾山前方後方墳を作ることができるペーパークラフトを用意しました。楽しく作品を作りながら各建造物の特徴について知ってもらえるようにしました。

○フォト・スポットコーナー

奈良・平安時代のシチュエーションで写真撮影ができるコーナーです。傍に置かれてある須恵器大甕は迫力満点。この甕には、何と平均的なお風呂の容量の約1.3倍の270ℓも水が入ります。インスタ映えにも一役買いました。



こども考古学クラブ

例年夏休み期間中に実施していますが、今年度は10月4・11・18日に実施予定です。「目指せ未来の考古学者！」をキャッチフレーズに小学6年生限定で募集したところ、10名の参加が決まりました。内容は歴史や文化財についての学習や、土器の実測・拓本・復元体験を予定しています。

おわりに

コロナ禍において、どれだけの方が参加・ご来館くださるか心配でしたが、結果、多くの方々にご来館いただきました。また、ふるさと考古学教室の参加者アンケートでは、「展示解説を聞き、考古学への関心が高まりました」「夏休みに親子の楽しい思い出ができました」など、嬉しいお言葉をたくさんいただきました。これらを糧にして、今後も県民の皆様に喜んでいただけるような企画・運営に努めていきます。

(小嶋 剛)



にな がわ くる さき たね だ 蝮川氏関連の館跡か？—富山市黒崎種田遺跡—

とっておき埋文講座②

富山市埋蔵文化財センター専門学芸員 鹿島 昌也

はじめに

黒崎種田遺跡は、北陸自動車道富山IC南側、国道41号の西側に広がる遺跡で、すぐ南には中世の蝮川館跡が位置します。この館跡については、とやま歴史的環境づくり研究会から『蝮川館跡調査報告書』（1998年）が刊行され、発掘調査は実施されていませんが、詳細な測量・文献調査等が報告されています。蝮川館跡は、東西110m、南北250mの範囲に、北郭（現在の県医師会館、健康増進センター付近）と南郭（現在の曹洞宗最勝寺付近）を有し、14～16世紀を中心に営まれていた城館と紹介されています。現在でも最勝寺境内には土塁の痕跡や蝮川氏の歴代墓碑などがみられます。アニメ「一休さん」に登場する蝮川新右衛門のモデルとなった室町幕府の政所代を代々務めた蝮川氏出自の地とされます。



蝮川館跡之図（とやま歴史的環境づくり研究会1998『蝮川館跡調査報告書』より）

報告書には、江戸時代に描かれた「蝮川館跡之図」が紹介されています。館跡の北側に小さな文字（絵図の赤色四

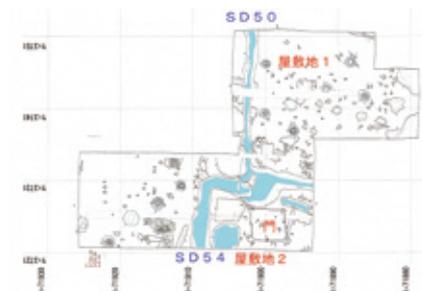
角）で「此辺所々高下アリ、土人云屋敷跡也ト、不分明難図」とあり、蝮川館の北側に地元で「屋敷跡」と伝えるところがあったようですが、関連は明らかでないとい記されています。

この館跡の北側に位置する今回の調査区周辺では、これまでアパート建築などで、何度か試掘調査を実施しましたが殆ど遺跡はみつきりませんでした。先程の絵図にも記されているように、元々地形的に高低があり、後世のほ場整備などで削平されてしまったのかもしれない。

今回の発掘調査では、屋敷地の区画に伴う溝跡や井戸12基、竪穴状遺構、土坑、石室等の遺構を検出しました。タイトルにもあるように、これらの遺構や出土した遺物からここが蝮川氏と関連する館跡なのかを4つのテーマに沿って検討します。

①堀で囲まれた屋敷地

まず一つ目は、①堀で囲まれた屋敷地がみつかりました。調査区内からは、L字状に折れる2条の溝跡を検出しました。SD54（屋敷地1）とSD50（屋敷地2）です。SD50は溝が途中途切れる箇所があり、門があって屋敷への入り口ではないかとみえています。



堀で囲まれた屋敷地

②馬小屋が併設

次に、②馬小屋が併設されていました。SD50の北側に長さ4.4m、幅1.6m、深さ43cmの竪穴状土坑を検出しました。この遺構に伴って井戸の水溜の曲物を利用した施設が検出されました。馬小屋に伴う尿や肥溜めの施設ではないかと推測しました（自然科学分析の結果、寄生虫は検出されなかったため、馬の足洗い場や水飲み場と推測しています）。



馬小屋SK 35 14世紀前半～中頃
長さ4.4m、幅1.6m、深さ43cm

篠崎譲治氏は著書『馬小屋の考古学』に馬小屋の条件として、(1)カマド・炉がない、(2)竪穴が設けられる、(3)床面が傾斜している、(4)尿溜めがある、(5)スロープが設けられる、の5つを挙げておられます。この条件を基に県内の発掘調査事例を探すと、本遺跡の近隣では、任海宮田遺跡などでよく似た遺構が中世の掘立柱建物に付随して見出すことができます。



富山市任海宮田遺跡（古代～中世）

このような馬小屋に該当するような事例をいくつか紹介します。12～13

世紀の集落遺跡、富山市婦中町中名Ⅱ遺跡では、河西所長（県埋文）が掘立柱建物の復元図を紹介し、その中にウマヤが配置されています。篠崎氏は南砺市梅原胡摩堂遺跡の14世紀後半のSB102に伴うSK3019を馬小屋と指摘されています。ほかに、射水市黒河尺目遺跡や富山市水橋金広・中馬場遺跡の竪穴状遺構なども馬小屋と推測されます。

黒崎種田遺跡では、奥歯と前歯が良好に残る馬歯が出土しています。3～4歳の雌のウマと推測されました。当屋敷地に馬がいたことが裏付けられました。

③井戸が多数検出

次に③井戸が多数検出されました。その井戸の検出状況に注目してみました。調査区の南東から北西にかけて、ほぼ等間隔で井戸が一直線に検出されました。これは、この場所で地下水脈を把握していた一族が何世代にも渡って暮らしていた、つまり蜷川氏一族がこの地に屋敷地を形成していたことを裏付ける一つの材料になるとみています。中世の早い段階から石組み井戸が多用されることも、有力者がいたことの証ともなります。



完掘状況全景（上が東）

また、幾つかの井戸では祭祀が行われていました。なかでも注目されるのは、SE61の祭祀行為です。積んでいた石組みを最下段のみ残して取り除き、石の上に漆器皿と木箸2本が供えられていました。これを見て思い浮かんだのが、蜷川氏の家紋である「合子に箸」です。この家紋とよく似た配置で漆器と箸が置かれていました。「蜷

川」などと文字入りの資料が残れば良かったのですが、今回の調査では、ほとんど文字資料は見つかっていません。よって、このような状況証拠から蜷川氏と関係があった一族の屋敷地ではないかと推測しています。



黒崎種田遺跡
SE61 井戸祭祀の状況



「右三巴」
蜷川氏家紋



「合子に箸」

④武士の持ち物の出土



金付き土師器片の出土

最後に④武士の持ち物の出土です。文字資料が少ないと話しましたが、文字を書ける人が使っていた越前焼の硯が1点出土しました。他に珠洲焼の小壺に「天」か「無（无）」とへら書きされたものが1点出土しました。あと、武士が身に着けていたとみられる刀の鐔の切羽の部分がみつき、銅製の表面に漆が施されていました。また、一番注目されるのは、金が塗られたかわらけ（土師器皿）片が出土したことです。県内初めての出土です。類例を各

地で探しているところですが、京都では山科本願寺跡から1点出ていますが、16世紀以降の新しい時期のものです。15世紀以前のものは今のところみつからないとのこと。金閣寺に代表される室町文化（北山文化）の頃には多く製作されていたと思いましたが意外でした。近隣では新潟県胎内市の江上館跡から破片が出土しています。山口市の大内氏館跡からも出土しています。中世の守護大名や地域の有力豪族の館跡から出土しているようです。

終わりに

以上の調査成果をまとめると、溝で区画された屋敷地があり、馬小屋もみつきりました。井戸が多数造られ、特徴的な祭祀を行っていました。武士の持ち物に加えて金付き土器も出土しました。蜷川館跡から北へ100m程の位



刀の鐔（切羽）漆塗り

置でみつかった屋敷地で、その存続時期は、出土品から13～15世紀を中心とした時期と蜷川氏が活躍していた時期と重なることから、蜷川氏一族かその有力家臣の屋敷跡と推測しています。

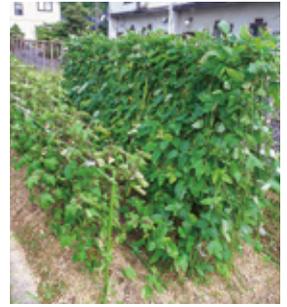
講座では、蜷川氏の前身である宮道氏との関係や、蜷川の地から京都へ移り政所代として活躍した後の江戸期以降の旗本蜷川氏の動向についても紹介しましたが、紙幅の関係でここでは省略させていただきます。

（令和2年7月5日

第1回 県民考古学講座）

埋文 あらがると

古代農場「まいぶんファーム」登場!! —ササゲ、エゴマ、綿花の栽培に挑戦—



当センターでは今年度、敷地内に古代農場「まいぶんファーム」を作り、縄文人が食べていたとされるササゲやエゴマのほか、江戸時代から全国で本格的に栽培が始まったとされる綿花の栽培を始めました。このうち、ササゲとエゴマは縄文時代前期の「小竹貝塚」をはじめ、全国の遺跡で見付かっています。綿花は、日本では江戸時代以降、綿織物として急速に広まりました。収穫したササゲとエゴマは、縄文人も食べていた食材として当センターで展示、紹介する予定です。綿花は、今後綿から糸を紡ぐ体験活動を検討中です。どうぞ、ご期待ください。

ササゲ



(7月16日) 6月15日に種蒔き、同18日に発芽し、つるが伸び始めました。



(8月1日) 藤色のきれいな花が咲きました。



(8月17日) 鞘は長いもので50cmを超えます。



(8月29日) 収穫したササゲです。小豆を大きくしたようなイメージです。

エゴマ



(6月17日) 種蒔き前、種の様子です。とても小さいことが分かります。



(6月29日) 1週間以上経ち、ようやく発芽です。小さな子葉がかわいらしいです。



(8月1日) 間引きながら、大きくしていきます。



(8月27日) 葉の大きさは掌ほど。小さかった種や子葉からは想像ができません。

綿花



(5月26日) 発芽した苗です。2枚の子葉の間から葉が出てきました。



(7月16日) 定植した苗が大きく育ちました。



(7月19日) 黄色く可憐な花が咲きました。



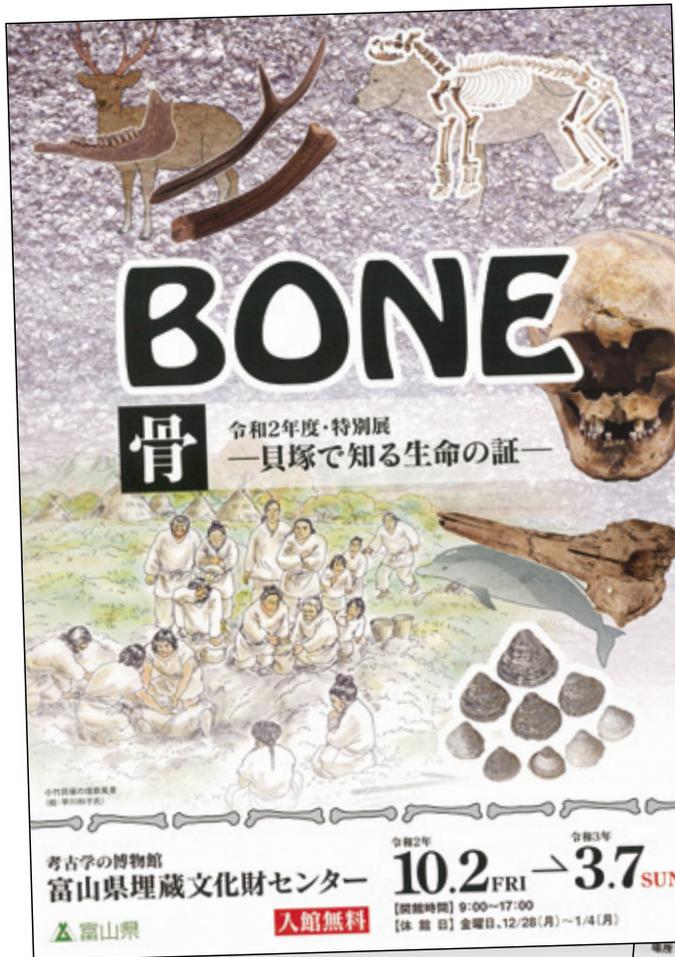
(8月26日) 実が開いて綿ができました。触ると、中に種がありました。

(松嶋 隆徳)

特別展

「BONE<骨>

—貝塚で知る生命の証—



記 念 講 演

令和2年10月17日(土) 13:30～
形質人類学から見た
小竹貝塚人

- 講師 国立科学博物館名誉研究員 溝口 優司氏
- 会場 当センター会議室

令和2年11月8日(日) 13:30～
縄文時代のお魚事情

- 講師 魚津水族博物館 館長 稲村 修氏
- 会場 当センター会議室

令和3年1月17日(日) 13:30～
小竹貝塚出土骨の分析

- 講師 金沢大学助教 覚張 隆史氏
- 会場 当センター会議室

古写真発掘!—《6》



石垣遺跡

昭和46年（1971年）調査

魚津市石垣

石垣遺跡は、魚津市の片貝川左岸の河岸段丘上にあります。縄文時代中期の遺跡として知られていますが、中世の貴重な遺物も出土しています。

昭和45年・46年にかけて、ほ場整備をきっかけとして発掘調査が行われました。

この内、昭和46年に県教育委員会が発掘調査した地区からは、中世の蔵骨器や人骨、五輪塔、銅銭等のほかに、ほぼ完形品の珠洲焼の甕が出土しました。遺跡の周辺に「寺」や「坊」がつく地名が多く、この場所も寺院等に関連があるお墓の跡と考えられます。

この発掘調査の際にも地元の方々や魚津中学校の歴史クラブの生徒たちが発掘調査に参加してくださいました。

写真上は、中学生が発掘調査に参加している様子と思われる。下の写真は、珠洲焼の甕を掘り出しているところです。口径70cm、高さ64cmにもなるたいへん大きな甕です。

編集後記

今年度から始めた古代作物の栽培。収穫の喜びを感じつつ、豊かな秋の恵みに感謝しています。さて、センターでは、10月2日から開催される特別展の準備に大忙しです。ご来館をお待ちしています。（担当 松嶋）

富山県埋蔵文化財センターニュース「埋文とやま」VOL.152

令和2年9月30日発行 編集／富山県埋蔵文化財センター 〒930-0115 富山市茶屋町206-3 TEL076-434-2814
URL <http://www.pref.toyama.jp/branches/3041/maibun/>

